

ガラパゴス・エフエクト

針谷卓史

Illustration
宮部サチ

ある平和な昼休みのことだった。

「教授」こと木曾明久君はふと思いついたように、廊下をすれ違う一人の女生徒に「好きです。付き合ってください」と挨拶した。

友人と談笑していた彼女は、突然投げかけられた告白にちよつと眉を上げ、両脚を揃えて立ち止まった。クセのなかったポニーテールが小さく揺れる。

高校生活とは、箱庭系のロールプレイングゲームみたいなもので、僕らは日々、閉ざされた社会の中で、暗黙に求められた役柄を演じている。優等生は優等生らしく、不良は不良らしく、非モテは非モテらしく。

この場面で彼女に求められていた言動は以下のようなものである。

……俄にわかに頬を赤らめ、先刻まで談笑していた相手

に目で助けを求める彼女に、友人は無言で応える。

「自分で何とかしなよ」。彼女は眉をひそめる。が、意を決して教授と向き合い「あの、御免なさい。気持ちには嬉しいんだけど、わたし……」

役柄が「ぱつとしないエロ道化」であるところの教授は「あー、やっぱり駄目だったかー」と天井へしかめっ面を向ける。

しかるに、この女生徒ときたら「喜んで！」と、実際そういう顔をしてぐつとコブシを握つたらしい。あんまりなルール違反に、脇で聞いていた彼女の友人がせり上がるような叫び声をあげて目を剥いた。

「ちよつと、ヒノキ、あんたコレでいいの？」と、つい失礼なコトバが口を衝いて出た。

しかしそれも無理のない話だ。というのも、教授が告白した相手、それが人生に倦んでいる感じの無口な醜女しじめであれば問題なかったのだが、実際のところは、よりにもよって和弓部主将の小松原こまつばらヒノキさなんだからだ。

初めて我がクラスにそれが伝達された時には、激震が走った。

互いに人違いをしているのではないかとか、「付き合っている」の意味合いが常人とかけ離れているのではないかとか、男女間わず無茶なことばかり言っているのかなか現実を受け容れようとしなかったが、両者がそれぞれ「交際している」と言うのだから、我々は納得できないながらも理解していくしかなかった。

女性には三通りのタイプがある。

①付き合えるなら付き合いたい。②付き合うのは御免被りたい。③付き合えるなら付き合いたいものだが、明らかに男性全般や恋愛一般に興味を持っている様子がなく、このタイミングでは誰が告白しても脈がないだろう。だから便宜上、こちらとしても恋愛の対象から外す。

僕の内なる世界で、小松原さんはガチの③だった。これは僕に限った話ではなく、おそらくは学年中

の男子がそのように判断していたはずだ。

小松原さんが教授と交際を始めた時に皆の間を駆け巡った、あの名状しがたい戦慄は、「教授ごときが！」という驚きや怒りよりも、「小松原ヒノキッて、③じゃなかったの!？」の方に多く由来していたのではないかと思われる。

ともあれ、小松原ヒノキ教授問題は、我々の生活環境を著しく乱した。

絶対的に③だと思っていた女性が、本当は①だった。ということとは、あの子も……？

から始まる勘違い＋妄想が、多くの男女を風車へ突撃するドン・キホーテに変貌させたのである。

ために、学年中が夏休み前後で「犬追物」のような状態になったが、やっぱり③は③に過ぎないと漸次再確認がなされるにつれて徐々に沈静化していき、やがて数多くの生々しい傷痕だけを残して祭りが終わった。

僕は、幸運にもその狂乱に巻き込まれなかった。

偶々その少し前に失恋をしたばかりだったからだ。
ひなたま

夏休みの終わりになって、彼女がいきなり「あと半年で高校三年生になることだし」なる謎な理由で別れを告げてきた時、僕はさすがに納得いかず、「もう少し解りやすい理由はないの？」と弱く抗議してしまっただが、「びた一文、ない」と冷酷に言い放つ彼女にそれ以上食い下がるだけの勇氣はなかった。

思い返して「アレが悪かったのか」という出来事は、二つばかりあった。

その一。

彼女は無口で、あまり、というよりほとんど表情を交えることがない女性だった。といつても、人生に倦んでいる感じの無口な醜女だった訳ではなく、涼しげな顔をキープしたまま「マジウケる」とか「この御菓子は垂涎すいぜんものだよ」とか「驚きすぎて目玉が飛び出るかと思った」といった、エモーショナル

ルな表現を多発する人だった。友人からはよく「すげえツンデレなんだろ」と確認されたけれど、彼女がデレたところなど僕は一度も見たことがない。

僕との交際を少しは楽しんでくれていた、と信じたけれど、「今日も籠べらぼう棒に楽しかったよ」と言う表情が、いつも全然和んでるように見えなかった。まあ普段から誰に対してもそんな顔をしているから、僕としては気にしなれば気にならないで済んだのだろうが、交際中のふとした瞬間に僕の内部で何か剣呑なスイッチが押されてしまい、その後は躍りになって彼女を笑わせようとしてしまった。

それが具体的にどういった行いだったのか思い出すとすると、とても頭が痛くなるのでそれをあえて描写しようとは思わないけれど、それがいけなかったのかも知れない。

その二。

僕の彼女は小柄で脚が太く、そのため重心がかなり下の方にある感じの子だった。

そんな彼女は、和弓部主将の小松原ヒノキさんを「理想の女性」と呼んでいた。

理想、と言えば聞こえがいいけれど、実際のところ、僕の前カノだったところの脚の太い子は、事あるごとに小松原ヒノキと己を比較して寂しく笑っていた。で、「昔から、あの子を見ているととても惨めな気分になるのよ」と告白してくるのだが、僕にとってそれは、何の価値もない情報だった。

そもそも比較っていったって、二人のどこをどうやって比べればいいのか、僕には皆目分からない。そう、あえて美しく喩えるならこんな感じだろうか。確かにダイヤモンドの方が希少だし値が張るよ。

それは客観的な事実として、そうだ。だけど、だからといってアメジストの方がダイヤモンドよりか美しさの点で劣る。ということにはならないだろ？

美しさっていうのは主観的な領域の問題なんだ。だからさ、確かに小松原さんの方が美しいってみんなが言っていたって、僕の中では君が一番なんだよ！」と、

僕は両腕を広げて見せた。

理屈・台詞回し・挙動。どれも思い描いていた通りに決まった。

彼女のハート、驚擱^{わしづか}み！ と我が内なる世界で拍手に包まれながら目を開けば、「わたしが当座問題にしているのは、宮宅^{みやぢけ}君の主観的な評価ではないんだけれど……」なる駄目出しをされた。

「しかも君、今、わたしのことをアメジストに喩えたよね。アメジストって、店先とかに塊のまま置かれてたりする、安い紫のヤツでしょ」

僕は無言のまま、唇を二、三度開閉した。

「きつとあなただって、ヒノキから告白されたら、わたしのことを振ると思う。今の喩え話で、それがよく分かったよ」

全然分かってねえよ！ つうか、ちゃんと人の話を聞けよ！ と僕は憤った。憤りの余り、つい「君の身体のバランス悪い感じが、とてつもなく僕にとって魅力的なんだ。その点、小松原さんには面白味

がないんだよ！」とか何とか、言ってるそばから後悔が始まるような台詞まで吐いてしまった。それがいけなかったのかも知れない。

このようにして失恋した後、僕は「この上なく体調が悪い」と言つて予備校を休み、三食・トイレ以外はひたすら眠る、という手段を以て失恋の痛手を忘却しようとした。

坂口安吾だったのだろうか、「人間、落ちるところまで落ちれば、あとはアガりたい放題！」みたいなことを言っていたけれど、落ちるところまで落ちるとか、マジで辛いし怖すぎ。と戦慄おののいた僕は、目を閉じて時間を早回ししながら、「前カノ」と化した彼女の仏頂面を記憶の奥深くへ封印しようと試みたのだった。

僕と教授とは元来、挨拶を交わす程度の仲だった。彼が急接近してきたのは夏休みが明けてからのことで、その経緯は以下の通りだ。

新学期早々、学校へ行つてみると「宮宅失恋」の報が既に学年中に広まっていた。

というか、職員室前の掲示板に黄色いチョークで「過日、話し合いの末、わたしたちは交際を打ち切ることで合意しました。これまで温かく見守つて下さった友達、先生方に感謝致します。これからわたしたち二人は理解し合える友人として新しく関係を築いていきたいと思つておりますので、今後ともよろしくお願い致します」とあり、その下に僕の名前と前カノの名前が記してあった。

これは、冗談？ それとも、本気まじ？

元・交際相手の計り知れなさに呆然としながら掲示板の前で突つ立っていたら、僕の背後に教授の気配がして、こちらが振り返るのを待たず「そんなお前に見せたいものがあるんだが」と言った。

それまでロクに話したこともないヤツからいきなりそんなコトを言われた僕は、「何を見せる気か」と思わず身構えたが、教授は相変わらずの低い声で

「昼休みになったら密かに美術室に来てくれ……」
と一層真面目な顔をする。

教授と僕との間で、深刻に話し合うべき何かがあったのだろうか。訝しく思いふかいながら昼を待ち、本校舎三階奥の戸を開いてみれば、どこでどうやって手に入れたのか、裏DVDの、モザイクのかけらもない男女の営みが正面のTVモニターに映し出されていた。

「おおう……！」

僕は後ろ手に扉を閉めて、その場に立ち尽くした。覚えず、顔が弛緩する。「鼻の下を伸ばす」とは、このような状態をいうのだろうか？

この映像を見せる教授の魂胆が分からないまま、僕は手近の椅子に腰掛けて「セーックス！」と拳をあげた。

……十分後。

僕はあっさり飽きた。単調なピストン運動とワンパターンな喘ぎ声が、僕の眠気を否応なく誘う。

「それにしても、モザイクがないというだけで性交とはここまで即物的に見えるものなのかー」と、違法映像初体験の僕はズレた感動をしていたけれど、それよりも驚きだったのが、その「癒し効果」だった。

ぼんやりしょんぼりと画面を見ている内に、「脚の太い子と別れてしまった」という傷が、何だか果てしなく詰まらない、滑稽でどうでもいいことのように思えてきてしまう。

教授。君はひよつとして、僕のことをこんな手荒い方法で慰めてくれているのかい？

それにしても、学校内であれだけ爽やかな恋愛をしておきながら、それと並行してこんな殺伐とした性行為の映像を野郎どもと鑑賞するなんて、ちょっと精神が器用すぎるんじゃないか。

というか、器用といえば、どうしてここにガラパゴス君がいるんだ？

僕の関心は、教授の横で当たり前のように座って

いるクラスメイト、ガラパゴス君の背中に引きつけられた。彼ともあろう人がこんなところでこんなものを観ていてはいけない、という気がしてならなかった。

というのも、「ガラパゴス君」こと宇土信介は、モテるヤツだからだ。

温厚な性質、冗談好きの人柄。それらがそのまま表情に表れているものだから、女子生徒たちは簡単に彼へ心を許して、昼休みごとに彼の周囲に群がっては世間話に花を咲かせていた。

クラス内でそこだけスポットライトが当たっているように見えて、正直嫉ましかったが、それを言葉や行動で表してしまうと、もう何だか二度と自己嫌悪の沼から這い上がれないような気がした。というくらいの羨ましさ加減だったのに、そんな「リア充」な宇土君が、こんなところで生臭く発電しておられる。

ビデオが終わった後、思わず彼の前方に回り込ん

でその辺の事情を本人に問い質したところ、彼は「ああいうのはモテるとは言わないよ」と寂しく笑った。

アルカイックな笑い方だった。

そう。あのモテ方は、決して彼の望んでいる形ではなかったのだ。彼としては「宇土くうん、宇土くうん」と一〇〇人の女子になつかれるより、一人なにし二人の愛し愛される関係の子が欲しかった。一日二四時間態勢で二週間くらい窓の一つもない地下の密室に引き籠もって、そんな絶対的彼女（たち）と、圧力釜の中にいるみたいに、相互依存のレヴェルを高めていきたい。

そんな息詰まるような願いを、彼は切実に抱いているのだそう。

「『ベティ・ブルー』みたいな愛と激情の日々が送れば、他には何もいらぬんだ」

陽当たりの悪い美術室の真ん中で宇土君は静かに呟いたものだった。

何も映していないTVからの黒い光を顔に受けながら。

僕は「また適当なことを言いやがって！ お前、本っ当に、『ベティ・ブルー』でいいんだな？」と問い詰めそうになっている自分を抑えて「そっか」と頷いた。

そんな宇土君は、高校生活も終盤に差し掛かっているというのに、未だ潑刺と成長を続けていることで皆から気味悪がられていた。

身長はとくに一九〇センチを超え、横幅も凄いことになってきたので、教室の椅子や机が拘束具のように彼の肉体に食い込んで、その人権を侵害するようになっていた。

「ガラパゴス君」と呼ばれる所以である。

教授と宇土君は、TVに視線を食い込ませていた。二人ともピースフルな顔をしていた。万人を無条件で愛しむ人の顔だった。

もしも世界中のメディアが一斉にエロだったなら、

戦争とかテロとか環境破壊とかスピリチュアルとかそういう嫌なものが総てなくなるんじゃないか。と僕は夢想し始めてしまい、そんな僕の頭からも、前カノに対するネガティブなあれこれが紫色の煙になって出て行ってしまった。

「君、またいいやつが入ったら付き合うかね」

教授が昼休み終了の予鈴にかぶせるようにして問うてきた。

当方に断る理由は見当たらなかった。

それから約二カ月、僕らはたまに申し合わせて美術室に集合し、弁当を片手に微塵のロマンも感じられない性交映像を一緒に眺めるようになった。

何というか、その映像は、夢に描いていた「愛の営み」的なものとはかけ離れており、セックスというより男女の肉体の衝突にしか見えなかった。

もう、教授の用意するエロ映像は、こちらのエロ欲求のために流れているのではなくて、むしろ僕ら

三人の友情レベルを引き上げるための通過儀礼と化していた。

実際、互いに無言で一個の画面を共有していると、僕は何だか無修正画像を媒介に残りの二人と理解し合えているような、そんな錯覚に陥った。

それが本当に錯覚だと思いついたのは、忘れもしない、学校祭の二日目のことだった。

「今までとは格の違う、大コーフンもののブツが手に入ったよ！」と教授が言うから、喜び勇んで本校舎三階の美術室まで馳せ参じたのに、そのDVDには絶望した。というよりドン引きした。

少女が全裸で天井から両腕を吊されていた。その真白い背中に、白く光る焼き鍔（よこざ）が押し付けられる。

さつきまで棒読み・片言口調で喋っていた女の子が、演技というには迫真過ぎる叫びっぷりで、突き出した舌を震わせている。

エロであるとかないとか以前に、こちらの感情はすっかり少女の方へ移入されてしまっていたので、

熱いやら痛いやら焼き鍔を持ったラバーマスク野郎が憎いやらで、単に不愉快だ。

それは、僕の横で両手の拳を堅く握っている宇土君にしても同じようで、さつきからしきりに虐待された犬のような視線をこちらに送ってくる。

対照的に、教授こと木曾君の目はきらきらと画面に向けられていた。表情だけを切り取れば、爽やかな好青年以外の何者にも見えないけれど、彼の視線の先ではDVDが高速で回転しながら毒映像を延々と展開させている。

白目を剥いてぐったりと失禁している少女は、成人しているようにも日本人であるようにも見えず、撮影のバックグラウンドを考えれば考えるほど気持ちが悪く陰に入っていく。こんな不条理を余儀なくされている少女の失意、絶望たるや、察するに余りある。あまりにも可哀相だ。僕は不覚にも二人の背後で声もなく泣き出してしまったのだが、教授はその辺にこだわりがないようで、ついには「いいねえ」と嘆

息までした。古物商が業物わざものを愛でる声色だ。

なお質の悪いことに、目こそ画面から全く離していないものの、その「いいねえ」は明らかに僕らへ向けられていた。

何の疑問も差し挟まずに同意を求めている、という事は、彼は己の趣向の特殊性に気が付いていない——？

ところが、ほとんど間髪入れずに「イイネエ」と宇土君が同意を示した。口調がロボットみたいになっている。

無反省に同意すんなよ！ と僕は憤慨したけれど、こういう薄暗い教室の中でわざわざ摩擦を起すような発言をするのめいかなものか。と、ついこちらも及び腰になり、黙ったまま首を斜めに振って誤魔化す羽目になった。

袖で目元を拭う。

美術室の入口には「関係者以外立ち入り禁止」と書かれたコピー用紙を貼っておいたから、不意に誰

かが入ってくる心配はなかったけれど、扉越しに「タピオカどうつすかー」といった中等部女子の声がかかると、その度に「僕らはかけがえのない青春のひとつときをこんなところで！」と今さらながら、微かな罪悪感を覚えるのだった。

『妖精討伐無残④』と書かれたディスクに教授が人差し指をかけたちょうどその時、生徒拘束時間終了を知らせるチャイムが鳴った。

「おお、ナイスタイミング」と教授が黒板の上のスピーカーを見上げたけれど、今日このまま彼と別れてしまえば、きつとこの後ずっと、別に好きでもない小松原さんのことを不憫に思いなして一日の残りを悶々と過ごすような予感がした。

僕は軽い口調で「誰か誘ってカラオケでも行かね？」と提案した。自分からカラオケなどと言い出したのは、この時が人生で初だった。それに対して宇土君が視線の定まらない目付きで「イイネエ」とまたロボ的同意をしたが、肝心の教授は「悪い、こ

れから俺、和弓部に行かないと」と、右肘から先を垂直に挙げた。

ああいう種類の映像を観た直後に交際相手の許へ出掛けられる、という感覚が理解できない。というより、性欲と恋愛の線引きがきちんとなされていないように気持ちが悪く、正直やめて欲しかったけれど、こちらのエゴを押し付ける訳にもいくまい。

そっか、じゃあ小松原さんにヨロシク伝えてくれ。と僕は肩を落として言い、依然として霧の中に置き去りにされたみたくなっている宇土君の肩を叩いた。すると彼は、遠ざかっていく教授の背中を見送りながら「僕にはよく分からないんだけど」と身体の割に小さな声で呟いた。

「女の人って、拷問みたいなことをされるのが好きなの？」

「ええっ」

仰天して振り返ると、宇土君と目が合った。宇土君のことだから冗談に決まっている、とは思ったの

だが、おびえているのか笑いをこらえているのか判断に苦しむような目付きになっている。

本来ならば「まあ、ごく稀に嫌がる子はいるけれど、それは専門用語で『不感症』って言うんだって教授が」とか冗談で返すべきところなのだが、万一本気にされると後々ありえない災いが降りかかってくるような気もする。

かといって、宇土君相手にあまり真面目に答えろと、こちらが物凄くバカな人みたいだ。

「あれは、ヴァーチャルリアリティだから」

僕は眉をしかめて見せた。「文字で書かれたものや映像で発信されたものは何から何まで全部嘘だ。と、この間TVで言っていたぞ。まして、あんな違法DVDなぞ以ての外だ」

中途半端なことを言って宇土君の肩を再度叩くと、彼は「そっか」と薄く笑った。が、その「ニヤリ」という笑いニュアンスがよく分からず、僕はますます不安になった。

親しくなつてから二カ月近くが経つたけれど、この宇土君という人が心の奥底で何を考えているのか、僕は未だによく分かつていなかった。

さて、僕らのHR入口扉には「絶賛大好評につき本日の営業は終了致しました」と殴り書きされた紙が、剥がれかけの状態でドアに引っかかっていた。

学校祭一日目の午前中から、その紙はずっと貼りっぱなしになっている。どうやらウチのクラスのHR委員ときたら本気で「的当てゲームの景品（図書券、計二万円）は全部はけたことにして、後日クラスメイトで五百円ずつ山分けにしような」計画を実行するつもりのようなのだ。

ドアを開ければ、机の乱れた教室内には男子が数人点在しているだけで、各々会話もなく携帯ゲーム機と向かい合っている。

「あれ、宮宅。お前さん今までどこにいたの」
内の一人が目だけ上げて問うてきた。

「教授や宇土君と、美術室で人生観を鍛えていたん

だ」

いい加減な返答をしながらそいつのゲーム機を覗いたら、画面に「目指せ勝ち組！ 株トレーニング」と表示されていた。他人のことをとやかく言える身ではないが、君らはかけがえない青春のひとときをこんなところで！ と説教をしたくなった。

その代わりに眉をしかめて相手の顔をのぞき込んでやると、彼は全く応えない顔で「そういえば、さつきヒノキがお前さんのことを捜していたよ」と言った。何を勘違いしているのか、声が若干上ずっていった。

太古、地球上にはキリンっぽい柄をした馬的な動物が生息していた。

彼らは高い木に実った果物をこよなく愛していたのだけれど、どう頑張ったところで首や脚がそこまで届くハズはなく、熟れすぎたり鳥に突かれて落下したものを泣き笑いで食べるしか術がなかった。

ああ、思うさまあの木の実を頬張れたらなあ！

毎日毎日毎日、枝を見上げて嘆息している内、彼らの首は代を追うごとに少しずつ少しずつ伸びていき、で、現在見られるようなキリンとなったのでした。

「ただだけ果物が好きなんだよ、キリン！」とも思うけれど、不断の努力が種の体型まで変えてしまったのだから、その情熱、称賛に値する。

そしてここから僕らはどういったことを学び取ることが出来るだろう？

……という問題について、僕は年に三回くらいのペースで考える。

「考える」とは言っても五分弱くらい「うううん」とパンダやらナマケモノやら連想して、パツタリと思索が行き詰まってしまうのが常だ。

そもそも、幸か不幸か、僕は進化論全般に全然関心を抱いていない。その証拠に、前カノから「宮宅くんは大体、進化について何か思い違いをしている

よ」と言われたのに、どこが誤解なのか未だに調べていない。

何で急にそんなことを語り出したかというと、渡り廊下まで差し掛かった時、植木越しに和弓場が見えて、そこで横向きに身体を開いて矢を構える小松原ヒノキさんの姿を僕は認めただけけれど、彼女の長い頸、端正な鼻を見るたびに、前カノのコンプレックスも相俟って「我々よりも五世代くらい進化を先取りしたような姿だなあ」と思ってしまうからだ。

そんな彼女の周囲だけ、時間が止まっているみたいに静かになっている。

僕と宇土君も足を止めて、彼女の立ち姿をぼんやりと眺めていた。

あれが教授の恋人だ。不意にまたそう思う。

と。それを咎めるようなタイミングで矢が放たれた。

放たれた矢は、的の中央を射止めるどころか、こ

れまでの文脈を無視するかのように明後日の方向の地面を穿った。

それを目の当たりにして、僕は身震いをするほど落胆したが、すぐに宇土君が「君、知っているかい。近くに教授がいると、ヒノキさんは緊張のあまり、まるで駄目駄目な選手になってしまふんだ」と解説してくれた。

その御陰で僕は、何だか一層がっかりしてしまい、その勢いで「僕への用件」とやらに対する関心が一瞬で雲散した。

まあ、大切な話ならまた向こうから連絡があるだろう。

「ここまで付き合わせておいて何だが、急に興が冷めたから帰るぞ」と僕は勝手を言った。

「それはいいけれど、ヒノキさんは結局、君に何の用だったんだろうね？」

宇土君はなおも和弓場の方へ目をやりながら続ける。「ところで宮宅君……君、少し期待していた

でしよう？」

「君はよくよく真面目な話ができない人だね。そもそも、小松原ヒノキに懸想けきうしているのは宇土君の方だろ」

「なぜそれを？」

僕は小松原さんが新しい矢を構える様を見届けると、ゆっくり宇土君の方へ向き直った。

「まあ冗談はさておき、僕は彼女をカテゴリー③だと決めつけていたから、教授と付き合うまで一度も小松原さんを女性として見てこなかったんだ。だから、今さらあの人の関係では何も期待していない」得々と説明をしたところ、宇土君は何が気に入らないのか次第に大きな身体を丸めて上目遣いになっていき、挙げ句こんなことを言い出した。

「そうだとしても、今は女性として見る事ができるはずだろ。第一、君は責任を感じないのかい」

「責任？」

思いがけない言葉に、僕は目を丸くした。

少しずつ暴走しはじめる

ガラパゴス君とその “エフェクト” ……

続きは『Powers Selection - 新走 - 』と!!